

‘お κόσμος, ぁλλοίωσις. ο βίος, υπόληψις.’

110号 1997.12.14

文・編集・発行

恋 怪子

LIVE : SPEED MACHINE 1997.10.18 新宿ロフト, 11.4 高田馬場AREA



photo by Sumiko

10月18日のロフトのライブに行ったのは、巨豚ヨークシャーという森川誠一郎 (Z・O・A)のバンドが目当てで、SPEED MACHINE は、ついでに見る、という感じだった。

弾き語りのようなGAZELLE と巨豚ヨークシャー、どちらも、^{かぶ}頭脳で考えた、観念の勝ったライブで、心に訴えてくるものが乏しかった。

秀孝が以前にやっていたジムノペディアは、好きなバンドで、何回もライブに行ったけれど、そのあとの秀孝のソロはあまりおもしろいと思わなかった。

だから、SPEED MACHINE は、三番目で最後だし、つまらなかつたら帰ろう、という感じで聴きはじめた。

それが、SPEED MACHINE は、“これぞ、バンド!”という、ガシガシとした音楽を演奏りはじめ、思わず立ち上がった。ジムノペディアのときの「破壊」に通じていたものがなくなって、「俺」が「僕」にかわったような「おだやかさ」があるのに、ガシガシとしたパワーに満ちていた。

自分の言い分をきいてもらいたくて泣いている子どものような秀孝の歌声が健在だったのが、まずよかった。あれは、秀

孝にしかないものだから。

ドラムもベースもパワーに満ち、秀孝の歌とギターに、ガシガシとはまっていた。背中がザワザワとなった。

4日のAREAのライブは、ロフトのときより、演奏時間が短かったが、やはり圧倒されるライブだった。

歌詞がよく聴きとれたせいで、秀孝の歌詞は「言葉の日常性」を突き破る力が強く、具体的なもの、たとえば「買い物カゴにプチ込んだ日々」(「隣のあたる場所 あたらない場所」)が、抽象的な世界をつくりだす、ということ、を、再認識した。この日、ステージの秀孝に見入っていたら、両眼がひっくりかえって、その裏側の、「もう一組の両眼」になった。この眼になると、現実感がまったく消えて、そのとき聴いている音楽の世界だけに生きることができる。

インタビュー(下記参照)でドラムの大島治彦が、「スピード・マシンになって、よりストレートになったというか、余分なものがなくなって、バンドだけのシンプルな形になったから、その辺はとくに重厚になっていると思う」と語っているが、まさしくそのとおりである。

WORDS : SPEED MACHINE [Time Limit] 1996.5.31号より

大島: 僕は秀孝をジムノの頃から見てるんですけどソロになって、地味になったなとは思ってました。ジムノに比べて。クローフィッシュの前半のころはすごく複雑な印象を受けたんですよ。でも後半一緒にやって、「あ、そうでもないかな」と思って。

で、今回のスピード・マシンになって、よりストレートになったというか、余分なものがなくなって、バンドだけのシンプルな形になってたから、その辺はとくに重厚になってると思う。

穴井: 最初は…すごくグラムな感じがしたんですね。音がっていうんじゃなくて、秀孝自体の感じが。クローフィッシュを初めて見たときは秀孝の印象しかなくて。さっき言ったみたいにグラムラスな感じがして…、秀孝だけがね。

だから今流行ってる日本の音楽って、俺は外国の音楽状況とかそんな知らないけど、とかく同時進行だったり、ちょっと先走りだったりしがちで。そういう意味では秀孝はとにかく新鮮だったし、その中にすごく確固としたルーツをハッキリ持ってるというのがわかる。それが今自分たちの出したい音っていう感じですね。それにトリオだからとくに歌を聴きながら演奏する世界ですし。

秀孝: やっぱりバンドをやり始めた頃に自分がやりたかったことを、もう一度やりたかったという感じかな。

結局はR&Rをやりたかったんですよ。

でも自分一人だけではすごく難しいなと思って…。家でいくらギター練習したってできる音楽じゃないから…。一番タブな音楽だからね。

で、ソロとかでずっと続けていくうちに今なら(タブなR&Rを)できるかなって自分で手応えを感じてた時だったんで。

資料提供: Sumiko Thanks!

LIVE : THE STREET BEATS 1997.11.22 市川CLUB GIO

THE STREET BEATSのライブに行ったのは、去年が2回(1月12日ウー・ステーション、3月9日CLUB GIO)、今年も2回(1月21日ウー・ステーション、11月22日CLUB GIO)。以前にくらべて極端に少ないけれど、それは、THE STREET BEATSに関心なくなったからではなくて、ライブに行けない状況だったから。

それでも、ライブ・スケジュールはいつもチェックしていた。

11月22日、CLUB GIOは、ほんとうに久しぶりのライブだったけれど、OKI健在、BEATS SPIRITS健在、だった。やっぱり、THE STREET BEATSは稀有なバンドだ。

『世界一悲しい街』と、めったに演奏ない[STEADY]が聴けたのもうれしかった。

ドラムの人メンバーチェンジしていた。

以前よりビートが粗々しい感じで、それが力強さにつながっていると思った。

アンコールは2回。2回目は、なんと5曲もやってくれて、「嵐降る夜」になったときには涙が出た。

THE STREET BEATSには、新曲はあっても、古い曲はない。10年以上前にできた曲でも、いつも現在の曲になっている

この日のライブがすばらしかったので、すぐにTHE STREET BEATSのライブ・アルバム[VICTOR ENTERTAINMENT]を買った。



© VICTOR ENTERTAINMENT ¥2,005

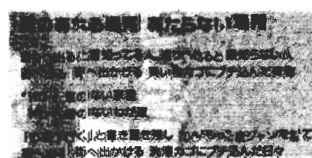
SPEED MACHINE TAPE : [I'm not 'MAN']

秀孝の歌詞の特徴は、「言葉の日常性」を突き破る力が強い、と上記のライブ感想に書いたけれども、もちろん、これは、歌詞そのもの力ではなくて、秀孝の声、歌い方、そして、演奏全体の力によっているということは何となく言える。

ベースの穴井仁吉が「トリオだから特に歌を聴きながら演奏する世界ですし」と言っていることが、そうした力の在処を証明している。

そうした特徴は、この[I'm not 'MAN']

でも、十分聴きとることができる。



一瞬のあたる場所へー
Wo… 怒らないわが家
Wo… 怒らない家
光を求め出がけよう 隣のあたる場所へー

★SPEED MACHINE:
秀孝(Yo. & G.) 穴井(B.) 大島(Dr.)

¥2,500

WORDS : JANIS JOPLIN



『ジャニス ブルースに死す』より

だけど、彼らに、ほんの少々でいいから勇気づけてもらいたかった。確かにモンタレーの時ほどはよくなかったよ——でも、今まででやらなかったことをやった。だけど、ガックリ来ている時に、そいつを蹴とばすってことはない。ほんのちょっとした肯定的な批評でよかったのよ——ちょっと助けてほしかった。なのに、歯をぶんなげられた。あれはジャン・ウェナーに、

すごい権力感を与したのに違いない。ああやって人を傷つけることができるんだって。でも、あたしは、あんな風になろうなんて思わない。彼が存在してるからって、彼は正しいことにはならないし、彼が、ザ・クリームをやったからって、それは、そんなことをやっていいってことじゃない。でも、多分、二つの見方があるんだろう。

「ひとりのリポーターとして、われわれは真実を伝えねばならないと思った」って。でも『ローリング・ストーン』紙は、全国的に報道しているわけでも、すべての事実を伝えていないわけでもない。「こんなふうだったんだよ、おまえさんたち、おれたちの言うことを信じなよ」っていうやりかたよ。しかも、そのやりかた、あまり主観的すぎて、もう話にもなりゃしない。何かを言うってことは、実体のあるなにかを言うことであるべきよ。はじめがあって、おわりがあって、まん中があって、クライマックスがあって、そして、最後の一行があるってことよ。小説家が一人の人物をつくりだすみたいね。